

1560—1640年間の 英国における教育ブーム

鈴木 美南子

I

英国の1560—1640年間はエリザベス女王の即位からピューリタン革命にいたる、いわゆる「ジェントリイの勃興期」と呼ばれ社会経済史上争点となる時期である。この時期に教育の分野においても社会経済的変化と相即して著しい躍進がみられたこと、とりわけ高等教育に大きな発展のあったことはこれまで数人の学者によって指摘されてきたところであるが、その普及の程度に関する数量的分析、初等・中等教育の実態、社会の各階層と教育との係わり、教育ブームの原因、これと市民革命との関係などについての具体的な研究は少なかったといえる。

『パスト・アンド・プレゼント』誌(“Past & Present”)は1962年から1964年にかけて毎年この時期の教育事情、わけても高等教育の中心であるオクスフォードとケンブリッジ両大学を主なテーマとする3つの論文を掲載した。第1はカリフォルニア大学のマーク・H・カーティス教授の「初期スチュアート英国の疎外された知識人」、第2はレスター大学のジョウン・サイモン女史の「1603—1640年間のケンブリッジ大学学生の社会的出自」で、第3がトレヴァー・ローパーとの「ジェントリイ論争」で有名なプリンストン大学のローレンス・ストーンの「1560—1640年間の英国における教育革命」である。これらはいずれも1560年から1640年までの英国に、顕著な教育の普及・拡大がみられたこと、特にオクスフォード・ケンブリッジ両大学を中心とする高等教育におい

て量的・質的に大きな転換があったこと、さらにこの教育的拡大と17世紀前半のラディカリズムとの関連などを明らかにしようとする力作であるが、殊にカーティスとサイモンの両論文の批判と修正を意図しながら、「教育革命」の全貌に数量的な根拠を与えようとするストーンの論文は、この教育ブームの明確な輪郭を我々に与えてくれるのである。そこで我々は主に彼の統計に依拠しながら高等教育を中心とするこの教育拡大の実態を全体として数量的に測定し、さらにこれが主としてどの社会的階層に益するものであったか、つまり被教育者の社会構成を明らかにすることによって「教育革命」の社会的・歴史的意義を考えてみたいのである。

II

ところでまず高等教育に先行する初等・中等教育についてはどうであったかという点、基本的な読み書き算術の広範囲の普及と、高等教育への進学機関であるグラマー・スクールの増加など顕著な発展がみられるのである。越智武臣氏はその論文「ジェントルマン・イデアールの形成(2)」において、英国の宗教改革にともなう修道院解散が、礼拝堂に附属していたリーディング・スクール、ライティング・スクール、ソング・スクール、エイ・ビー・シー・スクールなどの初等民衆教育機関を破壊し、その犠牲のもとに上流階級のグラマー・スクールが進出したと述べているが、ストーンは必ずしも初等教育の実態を過少評価しないばかりか、グラマー・スクール以外の高等教育進学機関の広範囲な存在を認めているのである。

16世紀の学校レベルの教育は互いに重なりあう場合もあるがだいたい3つの形態をとっていた。その極く初等のものが人口の大部分に対して行われた基本的な読み書き算術(3Rs)の教授で、ほとんどの場合非常に小規模な地域の学校で行われた。それらは日常生活の必要から生れた

自然発生的な形式のない学校 (free school) で、多くは宗教改革前同様、聖職者が教師の任にあたり、財政的には教区牧師や牧師補やヨーマンら一般信徒の熱心な寄付や遺産の贈与によって維持されていた。この種の学校は16世紀後半にピューリタンの聖職者(牧師補など不遇の聖職者に多かった)が多数出現するに及んで、聖書を広く民衆に読ませようとする彼らの熱意により新しい発展をみせたのである。農村ではだいたい10才から13才までの子供が地主やヨーマンの区別なくこの学校で学び、都市では読み書きのできる事がギルドに加入する必要条件であったことから、初等教育は農村よりはるかに普及し、中には各地区のコーポレーションによって組織され、その共同金庫から出費される貧しい子供たちのための学校さえあった。

こうした初等教育の普及からストーンは当時ロンドンの男子人口の約半分以上が読み書きできたと推定し、その周辺の6つの州で自分の名前を書ける成年男子のうち3分の1という高い比率のものに読む能力があったと推計している。

学校教育の第2の型は英語にもっと熟達し、算術や帳簿のつけ方などより実際的な見地から役立つ知識をさずけることによって、徒弟教育の準備に寄与しようとする、さらに長期間継続される教育である(ほぼ16才まで)。この種の教育はグラマー・スクールの低レベルのもので行われるか、さもなければ第1の形態の学校でこうしたカリキュラムにしばって教えられたのである。

第3の型はいわゆるグラマー・スクールでそのカリキュラムはたいていの場合、きまりきった宗教教育と古典的な言語学及び文法に限られ、ジェントリイや都市のブルジョアジーに大学や法学院に入るための古典の知識を授けることがその役割であった。

ところでこのような中等学校レベルの教育的拡大を全体的に数量化しそのスケールに精密さを与えたのはジョーダンであるが、⁽¹⁾ 彼が調べた

英国10州についてみると、1480年は多くて34校が開校されていただけであるのに対して、1660年までには410校が創立されていたという(そのうち寄付によるグラマー・スクールが305校で大部分を占める)。さらにジョーダンが17世紀の中期ごろまでには人口4,400人に対して1校、あるいはほぼ20マイル平方に1校の割合で学校が存在したことを示している。

この学校レベルの教育的拡大において確かに寄付によるグラマー・スクールの激増は顕著である。これはジェントリイや都市のブルジョワジーの息子達への教育熱を意味するものにほかならない。しかしこのグラマー・スクールの増加は社会の最低辺まで(未熟練で財産のない労働階級)益することはなかった。大学まで進級しうる機会はせいぜい小貿易商、熟練工、コピーホルダーまでしか開かれておらず、グラマー・スクールは下はこれらの階層から、上は騎士階級までを含み、極く上流の地主階級や貴族たちは1630年代までほとんどが家庭で私教師によって教育されるか、ウエストミンスターやイートンのような選ばれた施設で教育を受けたのである。

学校教育の拡大の中でわけてもグラマー・スクールの発展が著しかったことはジョーダンの研究によって明らかであるが、ストーンはこれに対して次のような異論をとる。即ちジョーダンは大学進学に必要な条件としてラテン文法を重視したため、新規に創立された多数の中等学校をもってラテン文法を教えていたこと、寄付行為によって成立していたこと、そこから大学進学が可能であったことなどを証拠に、そのほとんどをグラマー・スクールと算定してしまい、グラマー・スクールの数を高く評価しすぎているというのである。しかし実際にはラテン文法はグラマー・スクール以外でも教えられることがあったし、またラテン文法を全く教えない学校からも大学に進学することは可能であった。つまり寄付によらず学費の支払によって成立つ私的な教育施設で、大学進学可

能な教育を施しうるものが当時グラマー・スクール以外に多数繁茂したというのである。例えばケンブリッジ3カレジリストによる出身校の判明する272名のうち、127名ないし半分以下しか寄付によるグラマー・スクール出ではないという。⁽²⁾ それらは多く大学出のピューリタンの傾向の牧師補や聖書講師や教区牧師らが自発的に教えたものであって、このような形態で革命の直前には全国のごく小さな村々でさえ、人々はラテン語をはじめとして大学進学にふさわしい教育を受けることができたのである。そしてこの種の小さな私的中等学校の増殖は、多分寄付によるグラマー・スクールの増加の約2倍にものぼったとストーンは推定している。

(1) W.K. Jordan, **Philanthropy in England, 1480–1660**

(2) L. Stone, “The Educational Revolution in England, 1560–1640”, p. 46.

Ⅲ

次に1560—1640年間の教育ブームの中核ともいべき高等教育の拡大を毎年の入学者の最低数をおさえることによって明らかにしてみよう。

ところでこの時期の大学入学者数に関する最も包括的な資料として定評があり、カーティスやサイモンも利用したものはヴェンによって抜粋、編集されたケンブリッジ・オクスフォード両大学登録簿による統計である(ケンブリッジは1544年より、オクスフォードは1571年より開始)。⁽¹⁾ これによる数字はグラフⅠのとおりであるが、ストーンは登録簿の不備・欠陥を指摘しつつその数字をそのまま受入れることはできないとして、当時のカレジ入寮者の記録と比較・検討し、統計上の必要な処置を加えて調整した結果、これまで知られていた数字が全体に低すぎたこと、即ち大学入学者数は登録簿が示すより実際はずっと急速に上昇し、また降下したことを明らかにしている(表Ⅰ、グラフⅢ)。

この数字でみると拡大の最初の波は1560年代に始まり（むろんこの時期の数字として参考にしうるものはケンブリッジのそれだけであるが）、両大学においておよそ1583年にピークに達している。そしてその後ジェームズ即位（1603年）の時期まで小康がつづくのである。この小康状態の原因についてはあまり知られていないが、一部にはイデオロギー的なもの、つまり1583年にウイトギフトがカンタベリー大主教に任命されたことから、ピューリタンたちが大学や教会の将来について不安をいだき大学進学を躊躇した結果であろう。さらに経済的理由——エリザベス朝末期の高率租税、貿易不振、飢饉相場などの影響が考えられる。それはオクスフォードの入学人員の低下がほとんど平民出のものに限られていたことから明らかである。その後1604年以降、市民戦争の勃発までつづく第2の大きな動きが始まる。そしてそれは1860年代まで再び到達することのないレベルまで入学者の数を引き上げた。その後、特にオクスフォードは市民戦争の打撃をひどくうけ1650年代と1660年代に入学者数は一時回復したが、両大学とも戦争前のレベルに再びもどることはなかった。そして1670年以降、17世紀後期から18世紀全体を通じて継続する長いゆるやかな低下がはじまるのである。

ところで高等教育は2大学に限られていたわけではなく「第3の大学」である四つの法学院（Inns of Court）の存在を忘れてはならない。法学院は将来法律家となる者のための専門的な職業訓練とともに、広くジェントリイに対して一般教育もほどこした。記録による法学院の入学者数はグラフⅡに示す通りである。

大学と法学院の入学者に関するこれらの数字から高等教育全体への進学者の最低の概数を出すことができる（表Ⅱ、グラフⅢ）。しかし先の法学院入学者数の中にはすでに大学で学んだ者の数も含まれていることから、これを約半数と推定すると正確な意味で法学院にだけ学んだ者は入学者の50%ということになる。さらに高等教育進学者の大部分はオク

スフォードかケンブリッジか四法学院で学んだが、中には外国の大学やアカデミーに留学したもの、あるいは家庭教師のもとで高等教育をうけたものも少ない。ピューリタンの息子たちはライデンやジュネーヴやスコットランドの大学に遊学し、さらに多くの国教忌避的な富裕なカトリックの家庭では、だんだん厳しくなる処罰にもかかわらず、大学教育や司祭としての訓練を受けさせるためヨーロッパのカトリック国に子供達を送ったのである。このような者の数は大学の場合と異って市民戦争に急上昇し、王政復古の頃下降し、大学入学者がへる17世紀末に向けて再び上昇している。

これらの数字は一連の仮説にもとづいてはいるものの、あらゆるケースにおいて高い方よりむしろ低い方の数値で計算されたので、高等教育入学者の最低数は把握できたといえる。これによると1630年代のピークの10年間には毎年最低1240人の青年達が高等教育機関に進学したのである。そしてこの1240名は同世代男子人口(17才)50040人の2.5%という高い比率を示しているのである。カーティスは前述の論文で17世紀初頭の大学入学者のうち約430名が聖職志望であったと推定している。⁽²⁾ その他に約160名が法律家となり、30名が医者を目指していたと考えられることから、この時期に英国は毎年、職業につかない約600人の教育ある人々を生産していたことになり、彼らは後にも述べるように当時の英国社会の性格に多大の影響を与えたのである。

(1) J.A. Venn, **Oxford and Cambridge Matriculations, 1544–1906**
(Cambridge, 1908)

(2) M.H. Curtis, “The Alienated Intellectuals of Early Stuart England,”
p.32.

IV

さらに我々はこの成長現象の社会的な意義を考察するため、どのよう

な社会グループがどのような割合でこの先例のない機会に利益を得たのかを見出す必要がある。つまり大学の社会的構成——高等教育受益者の社会的出自——を明らかにすることである。しかしこれも深刻な方法論的困難性を伴う。第1の困難性は今日残存する記録簿の大部分に記されている「ジェントルマン」という重要な身分的カテゴリーが、極めて曖昧でまた変動的であるからである。その主たる原因は増加しゆくブルジョワジーたちがジェントルマンを自称したと考えられることである。実際のところロンドンや主要な港のかなり実力をたくわえた商人達は事実上紋章や騎士の称号をえつつあったし、1603年以降法学院の入学者が原則的にジェントルマンの子弟に限られたことも身分的偽称の別の原因となっていた。しかしこの呼称にまつわる困難性は彼らの出身地が都市か農村かを区別することで大部分解決することができる。というのは全般にジェントリイは農村にすみ、商業・専門的職業階級は都市に住んだからである。また家庭教師のもとで教育を受け、そのあと欧州に大旅行(Grand Tour)に出かけフランスのアカデミーなどで学んだような者はまちがいなく貴族か、地主階級のトップクラスの息子たちであった。彼らだけがそのような贅沢のゆるされる社会的グループであった。法学院もまたこの種の社会的エリートと、もうすこし下のエリート部分の要求に応える独占的な教育機関であったことは明白である。事実その入学者の5分の4が地主階級の出であった。

大学の社会的構成に関する重要な証拠は1575—1639年間のオクスフォード入学者の身分的類別の記録である。彼らはスライド制で学費を払う目的のため父親の身分を明らかにすることが義務づけられていた。これに基づく数値は「ジェントルマン及びそれ以上」「聖職者」「平民」という3大見出しにまとめられ表ⅢとグラフⅣに示す通りである。しかしこれらの見出しは完全なものではなく第1のものは公爵や小ジェントリイや新興商人さえも含むし、第2のものは大主教から牧師補まで、第

3は商人、ヨーマン、専門的職業人、職人、労働者まで含んでいる。こうした点に加えて彼らが果して真実を語っていたかどうかという疑問も当然考えあわせねばならない。なぜなら身分を低くおけばおほくほど学費を少く払えばよかったからである。しかし一方地主以上の階級の長男はその地位を低くいうことによって4年間のところを3年で学位をもらえる権利を失うこともあった。中にはカレッジ入寮の時に低くいって、学位をとるとき高くいうことによってこのジレンマを解くものもいた。こうした問題を解決するためにも入寮時の記録と大学の記録をひき比べたり、出身地によって調整することなどが意味をもってくる。しかし偽称する必要のなかったものは正真正銘の平民出のものと、学位をとる意図のない極く裕福な家の長男であって、ジェントルマンの2、3男は当時の傾向からして、専門的職業人として独立しようと学位をねらって多数大学に流入したと考えられ、このあたりに身分の偽称が行われたと推定される。このような偽称の程度や脱落等を考慮した結果、実際はジェントリイの数を記録よりも多く平民を少なめに計算する必要があるといえよう。そこで全体を調整するとオクスフォードの1575—1639年間の身分分布は先の表Ⅲの最下段に記したように50%のジェントリイ、41%の平民と9%の聖職者ということになる。また同様の操作を経たケンブリッジ・カレッジ入寮者記録による出身階層分布は表Ⅳの通りである。

以上の大学の社会構成に関する数字から1560—1640年間にジェントリイ出の学生が年々増えてきたこととあわせて、この時代のもう1つの注目すべき特徴が明らかになる。それは社会の比較的貧しい層からの学生も大学にずっと存在しつづけたということである。もともと貧しい家庭のもののために設けられた奨学金が富裕な家の息子達の侵略によって横取りされたにもかかわらず、依然として大学における低所得者の数は富裕なもの増加とほぼ平行して増加したのである。後に述べるように16世紀の中期あたりから資産のある階級は様々な理由からその子供達

に大学教育を要求しはじめたが、それは多大の寄付を結果し 500 あまりの新しいスカラシップの設置となった。貧しい学生達は当然この恩恵をこうむったし、彼らはまたカレッジの中で自活の道を見つけた。つまり高い社会的身分のものが教師や学生の中に増えることは、彼らへの個人的サービスなど貧しい者たちが独力で学資金を得る機会を多くし、彼らは豊かな友人の援助を受けたり、彼らや教師の世話などのアルバイトをしたりして、給費生や勤労給費生として学業を続けることができたのである。いいかえれば貧困学生の数を増加させたのは豊かな地主の息子達の流入であった。

以上のことから高等教育の成長が主にどの社会的階層に益したかという議論が意味のないことであることが証明された。重要なのは社会全体としての教育の量的拡大という事実である。それにはあるレベル以上のあらゆる階層が関わっていたのである。地主貴族もジェントリイも専門的職業階級も都市ブルジョワジーも都市の職人もすべてが大学にゆき、農村の小作人やコピーホルダーまでがかなり大学に学んだのである。それは非常に貧しい者（むろん彼らが人口の大部分であったが）以外のすべてであった。彼らはまず学ぼうという熱意に欠け、また家庭の経済にすぐ役立たねばならないという通例の理由で大学にゆかなかったのである。

V

以上述べたようにロンドンの男性人口の半分以上が読み書きでき、またその周辺6州で名前のかける成年男子の3分の1が読むことができ、さらに17才の男子同年令人口の2.5%が毎年高等教育に進んでいたとすれば、1640年の英国人はそれまでのどの時代より優れて教育を受けていたと結論することができる。それは革命としかいいようのない量的拡大であり、おそらく17世紀初頭の英国はすべての階層についてみて、

世界でもっとも教育の進んだ社会であったといえるのである。しかし英国の教育はその後非常に永い間、同じ量的水準に再び達することはなかった。ストーンもいうように「直線的進歩への信仰はなかなかなくなりはないが、それは経済学や倫理学の分野において必然的でないので同様、教育においても必然的でないのである。」⁽¹⁾ 17世紀後期に入ると大学と法学院に入学する学生数は急減し、それが再び1630年代のレベルに到達しうるのは実に第一次大戦後なのである。高等教育の沈滞のあとを追い、1660年以後ラテン・グラマー・スクールが寄付の先細りによって衰退し16・7世紀の教育的拡大に終止符をうった。また多数の小さな村学校は教区牧師や牧師補やフリーな教師の私的経営によってしばらくは支えられていたが、それも次第に消えていった。

ところで1560～1640年間の驚くべき教育拡大の原因は明瞭である。まず一般的に指摘できることは文化の聖職者による独占という古い観念が打ち破られ、その結果として非聖職行政官と専門的職業人の需要が生じたことである。また別の重要な要因として考えられることは子供に対する考え方の変化であって、子供は父親の財産の一つとみなされるのではなく、その可能性は開発されねばならずその意見は尊重されねばならない一個人と考えられるようになったことである。他の文化的社会的宗教的要因ははっきりしている。第1にルネサンス人文主義の影響である。地主階級は良きにつけ悪きにつけ、16世紀のコレットやエリオットやマルカスター等の人文主義者や教育家の論調に感動し、カスティリオーネによって説かれた新しい社会理念に心を動かされていた。そこで彼らは息子達に学究的で古典的な訓練を受けさせようと、競って学校や大学に通わせたのである。かつて騎士道は馬術や武技を重視して学問・教養を軽蔑し、教育は聖職者になる平民の出世道と考えられたが、いまや社会の上層部は支配者としてふさわしくあるため必ずしも学位を必要とせず高等教育を要求するようになった（これが新興階級に対する彼らの

自衛手段でもあったことは越智氏の前掲論文が明らかにする通りである)。彼らは王侯につかえるためにも、下院や上院で聴衆をひきつけるためにも、同じ身分の者と上手に会話しうるためにも、ジェントルマンたるものはすべてかかる教養を必要とすると考えるようになったのである。地主ジェントリーの団体であった下院議院で高等教育をうけたものが1563年の38%から1640—42年の70%に上昇しているが、⁽²⁾ 17世紀中頃のイギリスの貴族・ジェントリーの教養は極めてたかく、内外人の絶賛するところであった。またブルジョワジーはなんら自主的な文化類型をもたずただジェントリーをまねるだけであったから、彼らも同様子供たちをグラマー・スクールや大学に入れたのである。こうして「ジェントリー及びそれ以上」の階層出の若いジェントルマンが「楽しみと装飾」のために学問を求め大学におしよせることによって、大学の中にジェントルマン・イデアールが形成されてゆき、後には逆に大学を出たものが「ジェントルマン」と目されるようになったのである。

また地主階級は息子たちに法律を学ばせるために法学院にも入れた。それは一つに彼らを治安判事にしたてるためであり、さらに不動産経営と切り離すことのできない絶えざる訴訟を注視するためであった。つまり治安判事に課せられる責任の増加と訴訟の異常な増加とが、貴族やジェントリーによって法学院が独占されるかげの二大要因であった。しかし一たん習慣が形成されると法学院への入学は実際的な考慮に加えて紳士きどりも重要な意味をもつようになってくるのである。丁度その頃土地所有は今までにないスピードで変化しておりそのピークは17世紀の20年代に来たが、通例にもれず多くの新規購入者はその息子たちに高等教育をうけさせることによってその財産にふさわしい社会的地位を獲得しようとしたのである。実に高等教育の増減は土地市場のそれと密接に関連している。一連の経済的趨勢——教会、貴族による大量の土地資本の食いつぶしを伴う、商・産業の成長、都市の拡大、農産品価格の上昇

カーブ、価格と賃金の鉄状の拡大——は全体としての国民所得の成長と社会的ピラミッドの最上層と最下層部の犠牲によるその再配分をもたらしたが、絶対的にも相対的にも社会の中間部分は数と富の両方において増大し、そうした状況では常にそうであるように、彼らは子供の教育に多くを投資したのである。

教育拡大へのピューリタニズムの影響もむろん重要である。英国ピューリタンの最も顕著な特色の1つは、彼らの憎む無知や怠惰に対する最高の武器としての教育の価値への多大の信仰であった。神の言葉を伝え、カトリシズムの審美的で情緒的な魅力のもつ浅薄さを暴露するため、彼らは奇妙なほどに学問それ自体を（異教徒の古典的学問でさえも）尊重した。ジェントリイや富裕な商人の中でかなり熱心なピューリタンは3Rsと宗教を多くの者に、ラテン語と宗教を少数のものに教えるために多額の資金を醸出したのである。実にピューリタン思想は教育革命に非常に重要な役割を果たした。時期は下るが1640—1660年間には、聖書についての知識をひろめプロテスタント神学の研究を発展させようとするピューリタンの情熱は、古典的カリキュラムを実際的で科学的なものに変えようとするベーコン学派の熱望と合致し、その結果各段階の教育の大巾の拡大や教育コースの急激な近代化のための広範囲な計画の発展がみられたのである。ピューリタンが教育を重視したことはニュー・イングランドにわたった最初のピューリタンが、まず総合的な教育制度の設立にとりかかり、ハーバード大学の創立を手はじめに広く民衆教育に力を入れ1650年代にはすでに母国よりはるかに識字率が高かったことから明らかである。

最後に教育過程が町や村の無謀な大衆に既成の社会的政治的秩序への服従を説くためにも重要視されたことを忘れてはならない。このように1560—1640年間の教育の非常な発展は、家族関係の微妙な変化と、文化的宗教的誘因、社会的野望という実際の刺戟、貧しい者たちの大衆蜂

起への恐れなどすべてが結合して実現したのである。

17世紀後半に始まりその後百年以上も続く長い教育的低迷の原因についてはあまり知られておらず、それは推測の域を出ない。新しい学校の設立は主にプロテスタントによるもの、実にピューリタンの宗教心の結実であったが、その宗教的情熱の冷却は不可避免的に慈善的遺産の醸出を減ぜしめたと考えられる。また17世紀中葉から後半にかけて地主階級は王権に対して勝利をえたが、権力が中部地方に移ると官職や宮仕えなどへの意欲は必然的に失われ、少くとも半世紀あるいはそれ以上の間、文明化された首都というカスティリオーネの理想は彼らにとって魅力を失っていたのである。さらに聖職禄をこえる聖職者の著しい過剰といづれにしても非常に貧しい聖職者の生活ぶりは親達に子供に聖職につかせることを思い止どまらせたであろう。次に17世紀後期と18世紀の土地市場の著しい逼迫は、その息子に上流の常套教育を受けさせることによって地主としての新しい地位にふさわしくさせようとする新興成金の数を減少させた。従って大学入学者の中で減少したのはブルジョワジーや都市の中下位の階級ではなくジェントリイや農村の貧しい階層であった(表Ⅳを参照のこと)。租税の上昇と地代の遅れによって財政的に苦しくなった小ジェントリイは社会的に身分の低いものとカレジホールで肩をならべることを嫌い高等教育から離れていったのである。最後に中間及び下層階級に教育を与えすぎたことが混乱の原因と考えられるようになったことから(それは主に空位時代ピューリタンによって促進された拡大と改革に求められた)、再び古典教育はグラマー・スクールや大学だけに限って、貧民の自由席はうばい教育はジェントルマンだけに制限されるべきであると信じられるようになった。こうして王政復古の後にはすでに教育機会と社会的地位とのあのあまりになじみ深い英国的結合が成立していたのである。

(1) L. Stone, op. cit., p.68.

(2) L. Stone, op. cit., p.63.

さてトーマス・ホブズは「革命の中核は大学である」といって当時の大学教育の中に1642年の叛乱の源泉をみたが、17世紀のラディカリズムと高等教育の関係はどうであったであろうか。また社会全体にわたる教育的拡大は市民革命の性格にどのような影響を与えたであろうか。小稿をしめくくるにあたってこの教育革命のいわば社会史的意義について若干ふれておきたいと思う。

まず社会が需要より多くの教育ある人々を供給したことが既成の秩序に対して決定的な危険を生み出したことはカーティスが証明しているところである。彼によると大学拡充の1つの有力な刺激はエリザベス即位当時に痛感された聖職者の不足であったが、その需要は女王死去当時一応満たされてしまったという。それは世俗的官職についても同じでチューダー時代の政府機構の拡充当時とは違って、縁故登用・売官の風はスチュアート朝に至ってますます甚しく、能力主義はおしのけられ需要と供給のアンバランスと不平の種はいたるところに現われていたというのである。しかも大学の発展はその時頂点に達しており、教育は拡大したが大学の供給する多数の知識人を満足させる十分な地位を当時のイギリスは提供しえず、そこに「疎外された」不遇な多くの知識人をあふれさせたのである。彼らの多くは低賃金の牧師補、聖書講師、また正規の聖職でない説教師となり、また一部は学校教師となったが、彼らの不満は当然既成体制への批判となり、彼らが「リーダーシップをとりうる人物」であったことが一層問題を深刻にしたのである。この危険の最初の段階はエリザベス治世の最後に現われ、大学教育をうけたものはロンドンの牧師補に流れ込み資格のない先輩をおいだした。そして全体に教育水準が上がることによってチャールズ一世の治世までに失業は学位をもつ聖職者にまで広がった。これら「疎外された知識人」は急進的な思想の持主となり一般人に対して変革を説いただけでなく、聖職者兼教師として

若い世代に圧倒的な影響を与えたのである。

問題の原因はバチェラーの供給過剰だけではない。大学や法学院、大旅行で高い教養を身につけたジェントルマンにとって英国の現状は彼らの欲求に合致するようなものではなかった。イギリスの宮廷、官僚機構、軍隊はあまりに小さく、幸い下院に議席をえてもその会期は全体に退屈なものであったし、たいていの場合は大学を出ても泥くさい田舎に帰り教育のない女性と結婚して一生を無為に送らねばならなかった。

しかしこのような教育ある人々の様々な不満という理由は過大評価されてはならないしそれが唯一の理由ではない。17世紀ラデイカリズムの重要な原因として次に指摘されねばならないのは、若い学校教師や大学教師が宗教的な異端者——ピューリタンであったという点である。彼らは説教壇を得、教育制度を獲得し、あらゆる場所に学校をたて、カレッジをわがものとして、全教育体系の中で青年達に新しい信仰を伝えたのである。わけても大学のカレッジ制と個人教師制は教師自身の独自で弾力的な教育を可能にした。というのはエリザベス即位当時「大学」の機能はほとんど学位授与に限られ、教育の実際はカレッジで行われていたため、公的な学則の定めるカリキュラムは依然伝統主義的であったが指導教師は学則外の自由な教育活動が許され、その個人的な好みと関心に従ってその掌握する学生を教育し影響を与えることができたのである。

第三の原因はコモン・ローヤーと王権との対立である。法学院でジェントルマンは従来と全く異った価値体系と共同利害とをえたが、それは17世紀初頭において君主制と教会に向ってするどく対立するものであった。彼らの主張はピューリタンと結合し、彼らは既成の法廷を否定し新しい法廷における彼らの優越権を追求したのである。

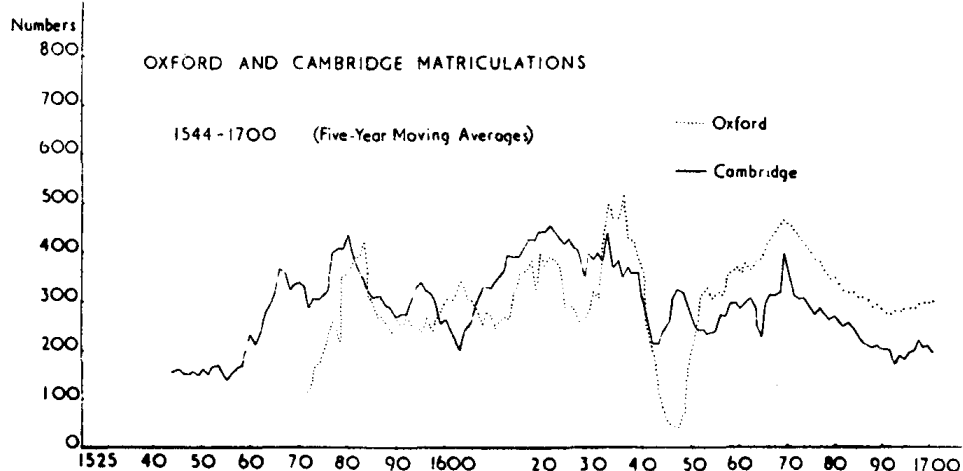
先立つ80年間の社会全体にわたる教育ブームは1640年代の革命の過程に様々なレベルで多くの影響を与えた。読み書き能力の増大は集中的に聖書を読むことを可能にし、はげしい宗教的熱狂を一般化するのに役立

った。またそれは世論を動員するのに重要な効果をもつ政治的パンフレットの洪水をうみ、歴史上初めて平等と民主主義に関する純粋に急進的な思想を出現せしめたのである。レヴェラーの投票権の要求はいまやほとんど自分の名前が書けまたおおかた読むこともできる人々をも含むことをもくろんだと思われる。もうすこし上層では教育をうけた中位の商店主や商人たちが保守的な都市の寡頭制を廃し都市と議会とを結びつけた。もっと上層部では大学教育をうけた小ジェントリイが1640年代の中期と後期に州委員会から指導的な家柄を追い出した。最上層部では法律学院での教育が地主たちに慣習法による王権の制限という危険な思想をうえつけ、また大学教育は彼らに公共に対する責任感、自らの力への自信、仲間を説得するに必要な論理と修辭の能力を与えた。彼らは大学時代の個人的な関係を基礎として結合し1640—2年にその見解を王に強いたのである。

以上我々は16・7世紀英国教育史の特異な一断面について学んできたわけであるが、それは単なる教育史ないし教育制度史の枠をこえて、社会史経済史文化史との密接な関連においてのみ理解しうる現象であった。しかし小稿では主に教育的史実を明らかにすることにおわり、こうした関係における複雑な様相やその歴史的意義についてはいくつかの論点を指摘するにとどまっている。これらの点についての詳しい検討や教育と社会に関する一般的な考察等については別に機会を得たいと思う。

1560～1640年間の英国における教育ブーム

< 付 表 >



グラフ I

表 I

UNIVERSITY ENTRANTS 1560-1699
(decennial averages)

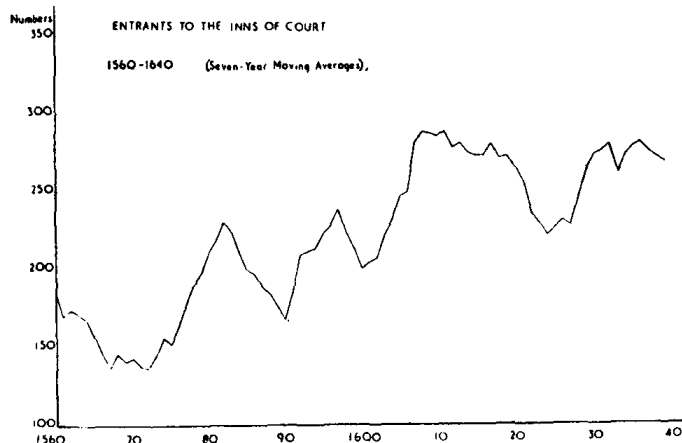
Years	Cambridge Matric.	Cambridge Adjust- ment	Est. Total	Oxford Matric.	Oxford Adjust- ment	Est. Total	Oxford and Cambridge Est. Total
1560-69	295	+20%	354	c. 250	+20%	c. 300	c. 654
1570-79	340	+20%	408	c. 310	+20%	c. 372	c. 780
1580-89	337	+20%	404	317	+15%	366	770
1590-99	298	+20%	357	259	+15%	295	652
1600-09	270	+20%	324	294	+30%	382	706
1610-19	394	+20%	473	316	+30%	411	884
1620-29	417	+20%	500	312	+30%	406	906
1630-39	400	+20%	480	460	+25%	575	1,055
1640-49	275	+30%	365	137	+40%	192	557
1650-59	259	+15%	298	309	+15%	455	753
1660-69	300	+5%	315	405	+5%	425	740
1670-79	291	+5%	306	396	+5%	416	722
1680-89	226	+5%	237	306	+5%	321	558
1690-99	194	+5%	204	281	+5%	295	499

表 II

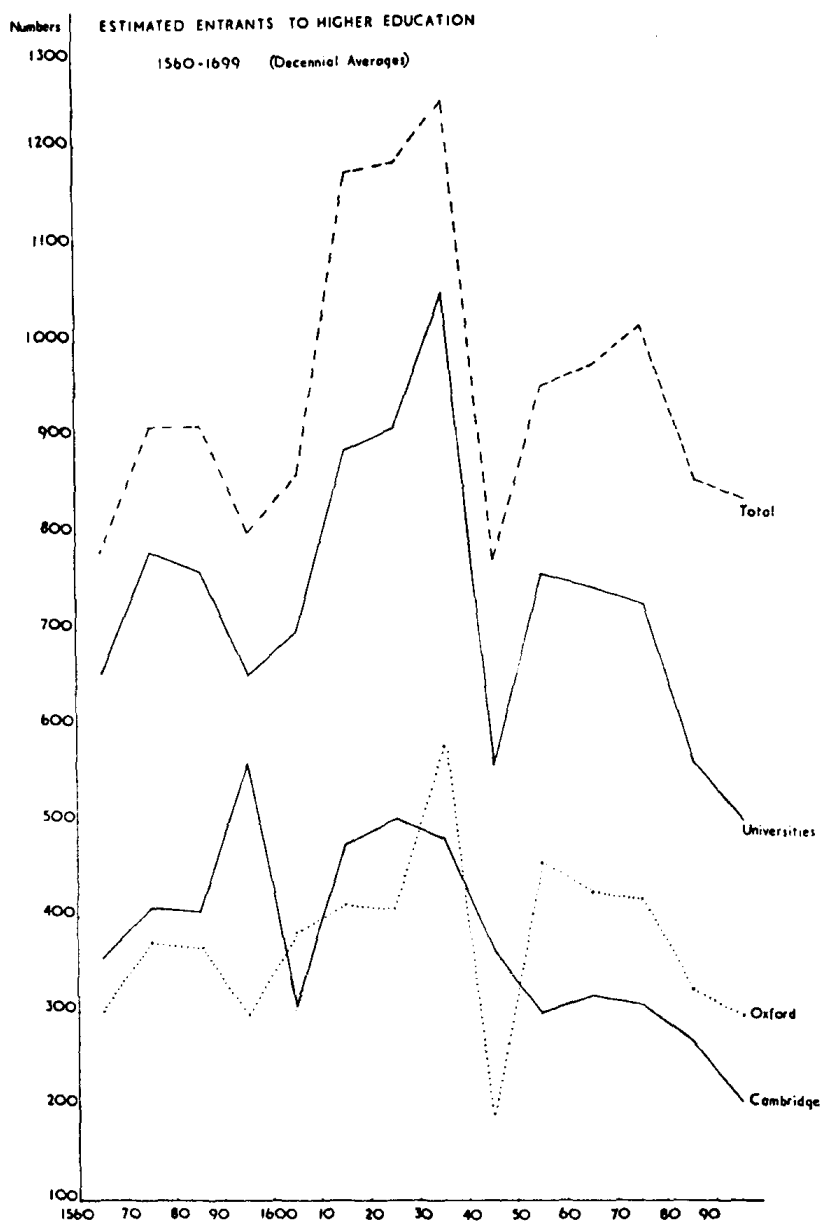
ENTRANTS TO HIGHER EDUCATION, 1560-1699
(decennial averages)

Decade	Universities estimated numbers	Inns of Court (50% of total entry)	Private and Abroad estimated numbers	Estimated Total (to nearest 10)
1560-69	c. 654	80	50	c. 780
1570-79	c. 780	79	50	c. 910
1580-89	770	103	40	910
1590-99	652	106	40	800
1600-09	706	119	40	860
1610-19	884	140	50	1,070
1620-29	906	120	50	1,080
1630-39	1,055	137	50	1,240
1640-49	557	109	100	770
1650-59	753	118	80	950
1660-69	740	118	110	970
1670-79	722	124	160	1,010
1680-89	558	119	170	850
1690-99	499	95	230	820

1560～1640年間の英国における教育ブーム



グラフ II



グラフ III

1560～1640年間の英国における教育ブーム

表 III

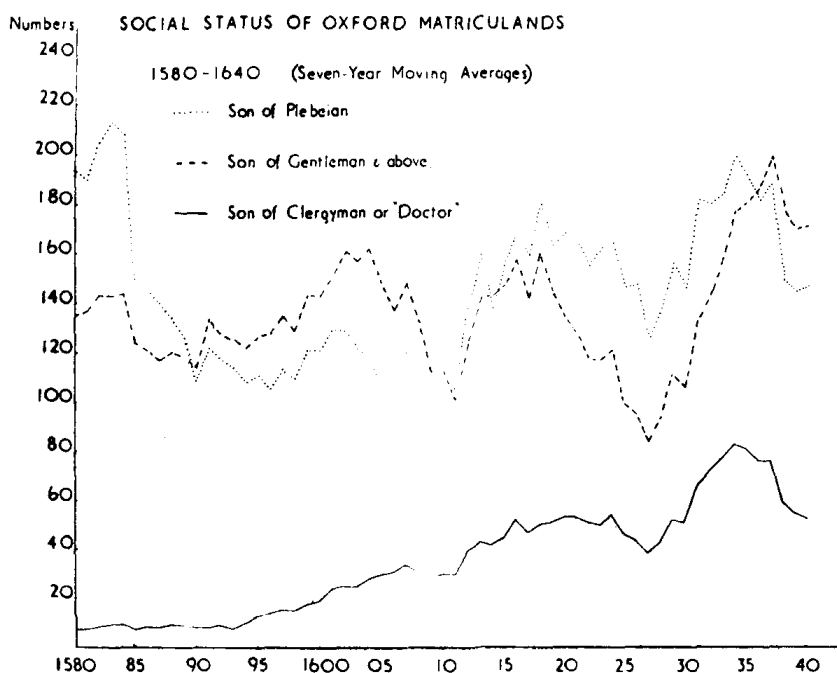
OXFORD MATRICULATIONS 1575-1639
(decennial totals)

Period	Gentlemen and above		Plebeians		Clergy		Total
	Nos.	%	Nos.	%	Nos.	%	
1575-09	489	39	766	60	13 (3)	1	1,268
1580-89	1,339	41	1,793	56	88 (18)	3	3,220
1590-99	1,267	50	1,142	45	122 (18)	5	2,531
1600-09	1,461	52	1,076	39	262 (36)	9	2,799
1610-19	1,107	41	1,233	46	355 (41)	13	2,695
1620-29	1,090	35	1,554	50	480	15	3,124
1630-39	1,703	41	1,754	42	722 (80)	17	4,179
1575-1639	8,456	43	9,318	47	2,042	10	19,816
1575-1639 (adjusted % of estimated total entry.)		50		41		9	

表 IV

ADMISSIONS TO ST. JOHN'S AND CAIUS COLLEGES, CAMBRIDGE, 1630-39
AND 1690-99
(decennial totals)

	St. John's				Caius			
	1630-39		1690-99		1630-39		1690-99	
	Nos.	%	Nos.	%	Nos.	%	Nos.	%
Knight and above	23	5	15	4	5	2	3	3
Esquire	42	8	24	7	25	8	8	8
Gentleman	123	25	87	25	146	46	27	28
Clergyman	80	18	96	28	54	17	17	18
Lawyer, doctor, school- master	15	3	22	6	13	4	14	14
Merchant	10	2	9	3	9	3	10	10
Artisan and shopkeeper	75	15	41	12	46	15	16	17
Yeoman and farmer	40	8	5	1	11	4	1	1
Husbandman, plebeian and "mediocris fortunae"	77	16	50	14	3	1	1	1
Total Classifiable	494		349		311		97	



グラフ IV

(以上の統計は本文中にも述べたように、ストーンの論文から借用したものであるが、算出方法など詳しい点については同論文を参照されたい。)

<参考文献>

Mark H. Curtis, “The Alienated Intellectuals of Early Stuart England”,
Past & Present, No.23, 1962.

Joan Simon, “The Social Origins of Cambridge Students, 1603–1640”,
Past & Present, No. 26, 1963.

Lawrence Stone, “The Educational Revolution in England, 1560–1640”,
Past & Present, No. 28, 1964.

Joan Simon, “The Reformation and English Education”, **Past & Present**,
No. 11, 1957.

Joan Simon, **Education and Society in Tudor England**, Cambridge Univ.
Press, 1966.

Mark H. Curtis, “Education and Apprenticeship”, **Shakespeare Survey**,
No. XVII, 1964.

Mark H. Curtis, **Oxford and Cambridge in Transition, 1558–1642. An
essay on changing relations between the English universities and
English society**, Oxford, 1959.

Lawrence Stone, “Literacy and Education in England, 1640–1900”,
Past & Present, No. 42, 1969.

Marius C. Jansen and Lawrence Stone, “Education and Modernization
in Japan and England”, **Comparative Studies in Society and History**,
No. IX, 1966–1967.

Kenneth Charlton, **Education in Renaissance England**, Univ. of Toronto
Press, 1965.

W.K. Jordan, **Philanthropy in England, 1480–1660**, London, 1959.

H.C. Porter, **Reformation and Reaction in Tudor Cambridge**, 1958.

1560～1640年間の英国における教育ブーム

- 越智武臣 「ジェントルマン・イデアールの形成(1)、(2)」、『立命館文学』、1962年5月、7月、(後に『近代英国の起源』、ミネルヴァ書房、1966年、第3章、第1節、「人文主義の行方」に収録)
- 米川伸一 「イギリスの教育と宗教」、『経済評論』、1970年10月
- 島田雄次郎 『ヨーロッパ大学史研究』、未来社、1967年